

大江源太郎ノート： 合衆国北西部製材業の一日本人労働者

黒 川 勝 利

はじめに

1920年代半ば以降のシアトル労働運動の保守化にともなう、シアトルを中心とする太平洋岸北西部の白人労働団体の間に日本人排斥の動きが復活した。他方で、当時の日本人移民社会の指導者の多くも、長年の努力がついに報われなかったという徒労感、彼等自身の高齢化と保守化も原因となつて、1920年代初頭に見られたような白人労働運動への共感を失っていった。

そのような中でも一部の人々は、1920年代から30年代にかけて、日本人労働者の組織化、アメリカ労働組合への加入、あるいは日本人労働者とアメリカ人労働者との提携のための努力を続けていた。1919年に鉄道保線工組合の日本人部を結成した山根良章、シアトルで『労働』を発行していた宮田主計などが良く知られている。大江源太郎もその一人である。

大江源太郎の生涯について、実のところ私はまだ把握できていない。私が大江に注目したのは、伊藤一男の『北米百年桜』の中の前田得一、峰岸竹次の回想を読んだからであるが、同書にしても、山根や宮田の活動についての方がはるかに詳しく記述されている¹。またその後においても私は大江の人生を記録した文献に出会っていない。カール・ヨネダの『在米日本人労働者の歴史』も、山根や宮田については言及しているが、大江に関する記述は見あたらない²。

その最大の理由は、大江源太郎が製材業の一労働者として地方で生活していたこと、および製材業における彼の努力が、鉄道業において山根が収めたような大きな成果を挙げることができなかったからであろう。

宮田主計は労働者というよりも言論人であつて、1920年頃からシアトルで『労働』というタイトルの新聞を発行していた。日本人社会では過激と見られていたようだが結構ファンも多く、東洋貿易会社の創立者であるシアトル日本人社会の元老、山岡音高のような影響力のある人物も宮田をバックアップしていた。一時は宮田自身、北米日本人会の役員を務めたこともある。1930年代後半の労働運動高揚期には日本人レストラン組合の組合長、日本人、中国人、フィリピン人合同組合の幹部にも就任した³。山根良章は鉄道労働者であつたが、先述したように日本人保線工の組織化に成功したのみならず、デトロイトで開催された1922年の保線工組合全国大会では、カリフォルニア代表の反対を乗り切つて、日本人として初めて参加を認められている。山根はまたポートランドで活動し、オレゴン州の日本人会の代議員、労働部長、理事などを務めている⁴。

大江もシアトルと無縁ではなかつた。1940年にシアトルで紀元2600年を祝う奉祝会が開かれた時には、その「第三式」の司会を大江が務めている。この時にはすでにシアトルに住んでいたのか、ある

いは一時的滞在であったのかは、『北米百年桜』に引用されている記事からははっきりしない。また前記の前田得一の回想によれば、大江たちがマカテオ Mukilteo で発行していた雑誌「マカテオ」はシアトルの労働社で印刷していたということであるから、大江と宮田の間に何らかの交流があったと推察される。しかしながら、大江が青年期から壮年期にかけてのもっとも多感な時期をマカテオをはじめとする北西部各地の製材所の労働者として過ごしたことは、疑う余地がない⁵。

このように大江源太郎の人生についての私の知識はきわめて限られているが、他方で彼がどのような意見を持っていたかは明らかである。大江が戦前シアトルで発行されていた邦字紙『大北日報』の熱心な寄稿者の一人だったからである。本稿ではこのような事情を踏まえて、大江源太郎の同紙への寄書（『大北日報』では「投書」ではなく「寄書」という用語が用いられている）を整理、紹介することによって、1920年代から30年代にかけての合衆国北西部の製材業における日本人労働者の状態を明らかにすることを意図している。

その場合生じる問題は、大江の手になるか否かが判明しない寄書が多数存在することである。その当時、大江も含めてかなりの数の製材業労働者が『大北日報』に自らの見聞、意見を寄せていた。その中には実名、筆名、匿名が入れ混じっているが、この点は大江による寄書も同様なのである。

完全に大江が書いたと断定できるのは、言うまでもなく「大江源太郎」、「大江生」と記された寄書である。「ヂーオー生」、「山家朴人」、「浦邊丘人」等と記された寄書も、諸般の事情や文書の内容に照らして、ほぼ間違いなく大江によるものであると思われる。しかしながら「次郎作」、「影の人」となると、多分大江の筆名であろうと思われるが、他の製材業労働者である可能性もかなり高い。「平助」は、大江である可能性を否定することはできないが、多分他の製材業労働者であろう、といった具合である。本稿では、もちろん大江であるとほぼ確実に推察できる寄書を中心に紹介するが、一部、大江が書いたものではないかもしれないが当時の合衆国北西部製材業における日本人労働者の状況と思想を理解する上で貴重である、と思われる寄書も含まれている。

1. まず1924年のレイキ・スティーブンス事件及びマカテオ事件に絡んだ寄書をいくつか紹介したい。

ジェームズ・ダンカン James Duncan のシアトル中央労働会議 Central Labor Council of Seattle and Vicinity 書記への就任、さらにはシアトル・ゼネラル・ストライキへの日本人社会の協力によって、1910年代末から1920年代初めにかけて日本人社会と北西部労働運動との関係は著しく好転し、ワシントン州では、労働組合による日本人排斥運動は一時的に跡を絶っていた。しかしながら、1923年、アメリカ労働総同盟 American Federation of Labor の圧力によってダンカンは辞任に追い込まれ、彼を中心とした革新派に代わって保守派が北西部労働運動の主導権を握った。それ以後、「組合内には東洋人排斥の空気が漲るやうになった」⁶。そのような状況を背景として、レイキ・スティーブンス Lake Stevens における日本人労働者の排斥事件が発生し、北西部日本人移民社会に大きな衝撃を与えたのである。

1924年1月24日の『大北日報』に掲載された次の寄書は、このレイキ・スティーブンス事件の発生を嘆き、抗議するものであって、筆者は記されていないが、発信地がマカテオとなっていることとそ

の内容に鑑みて、大江源太郎による可能性がきわめて高いと思われる。

マカテオ（十九日） 時事漫言

- ▲現今吾々労働者は直接間接に白人労働組合運動の大勢に支配され且つこれが恩恵に浴しながら反対に資本家の懐の中に安住の地を求むることを余儀なくされてゐる
- ▲日々の労働生活の中に屢々不利益を感じる種々なる條件について適當なる抗議を提出する何等の方法手段を全く有しない吾々はただ雇主の與ふるがまゝの條件に屈服する外はない
- ▲賃銀制度の廃止が叫ばれてゐる反面に公正なる一日の労働に對する公正なる一日の賃銀すら満足に要求することが出来ないのだ労働契約はあれども吾々に對しては一種の強制である以上に意味をなさぬ弱きものよ汝の名は日本移民労働者なりと云ひたくなる
- ▲吾々が痛切に厭やだと感ずることは労働争議に於て當然與みせねばならぬ白人労働者とも一致の歩調を保ち得ず反逆せねばならぬ筈の雇主に對しても充分の敵の意を示し得ず謂は偏せず黨せず單に白人労働者へ好意を表すことによつて胡麻化してゆかねばならぬ不徹底さ意氣地なさを思ふ時日本人労働者が馬鹿にされるは當然なりと云ひたい
- ▲吾々が心から癢に障はり残念に思ふことは白人労働者の頑迷不靈偏狹にして利己的なことである人種國籍政治宗教の如何に係はず労働階級といふ廣い限界の下に立つて共通利益の爲めに團結し協働し相戦ふ底の精神を今少し發揮してくれるならば何程吾々の爲めに幸ひであるかと思ふ
- ▲今日労働組合を組織しこれに加盟を欲しない者は余程の時代後れの愚者か卑怯者であるもし米國聯合労働組合が自由に吾々の加盟を許すならば彼等が常に排斥して止まぬ低級労働者であることが吾々自身が非常に屈辱と感ずるに相違ない
- ▲この意味に於て吾々には極力白人労働組合の不明偏見私心の余りに強きことを怒り憎み且つ蔑すまざるを得ない特に近時レーキスチープンに於ける狂態を思ふ時益々以て彼等の狂愚や及ぶべからずといひたい

この排斥運動の結果、日本人労働者はレイキ・スティーヴンスの製材所から退去を余儀なくされた。しかも騒ぎはこれに止まらなかった。排斥運動はなおも続き、長年多数の日本人労働者が働いていたマカテオの製材所を新たな標的としたのである。

同年4月12日の大北日報に掲載されている次の寄書は、そのいわば状況報告である。この寄書は、「ヂーオー生」と記されているところから筆者が大江源太郎であることが明らかである。

もっとも、マカテオではすでに述べたようにならかなり以前から多数の日本人労働者が就働しており、日本人と白人の関係も悪くなかった。したがってこのような外部からの扇動はマカテオでは成功しなかった。

マカテオ（十日） 排日宣傳ビラ ゴーオー生

- ▲二三日前當地製材所の構内へ排日の宣傳ビラを配布した者がある去る月曜日の午後八時からエヴレット市ロックフェラー街ヴァザホールに於てリンコンインヴシブルパスファインダーの後援の下にある知名の人の排日講演があると云ふこの廣告ビラには大きな字で日本人は退去すべき乎と書いて一般市民の來會を希望

するが特にレークステーション及マカテオ代表者の出席を待つと云ふ意味の事を大々的に書いてあるその次へアメリカ人が一週四日働きの窮境にあるのにどうして日本人が依然六日働きを続けてゐるのを見て居れるかと巧に現下の不景氣を捉へて再び排日の氣勢を揚げやうとしてゐる

▲一週四日働きとはエヴレット市内の製材所の事にてマカテオ日本人とは何等係りのない事だが雇主側から不當な條件を押し付けられて對抗策を講ずる事の出来ない無力な労働組合員の多い事にまで日本人を引き合ひに出されては耐らない日本人労働者が多年の間幾多の犠牲を拂つて築き上げて來た現實を一片の排日文言口頭宣傳で破壊し得ると思ふのは滑稽でもあるが何事に依らず理由を附して排斥の種にする彼等の執着心にも困つたものだ

▲リンコロン、インヴシブル、パスファインダーとは正体の知れぬ其實保守的労働組合や在郷軍人團等を打つて一丸とした排日を目的とする結社の一つであるらしい而して全米國に於ける唯一つエヴレット市に組織されたる團體であると思ふ

2. このような緊迫した状況の中で、かねてから日本人労働者の組織化のために努力を続けていた北米日本人会は、1924年4月、製材業における組織化について協議するために、ワシントン州内の諸製材所の代表と、北米日本人会で労働問題を担当していた第四部の参事員との会合を設定した。ところがこの会合に、ポートアンジェルス、イナムクロウ、スノーコルミーの製材所は代表者を派遣したけれども、他の製材所、即ちレヴューウォース、ウェスト・シアトル、マカテオ、セキアム等の製材所からは出席がなく、これを「遺憾とせり」とする記事が4月22日の大北日報に掲載された。それに対する反論が次に紹介する寄書であり、5月1日と2日の大北日報に、上下に分けて掲載されている⁷。この寄書は、大江の製材業労働者としての自負心と、地方の労働者に対して指導者、有識者として臨みがちな北米日本人会幹部やシアトルの有力者への反発が強く表明されている点で、興味深い。

反日會熱（上） マカテオ ゴーオー生

四五日前の本紙上に同胞製材所就働者の組合組織に關する協議會にマカテオ其他の代表者の出席なかりしを遺憾云々と發表されてゐたから日會よりは豫め各地のブックマンにもそれぞれ通知があつた筈である通知を受けて出席しなかつたのは特別の理由あつたかそれともその必要を認めなかつたかいづれにもせよ問題が問題だけに各当事者は慎重熟慮すべきであつたと思ふ他のキャンプ内のことは知る由もないが我がマカテオから代表者を送らなかつた事にはそれを妥當と認める私の意見があるから書いてみる

△第一日會からそんな通知が來たかそれすら一般に知られてゐないし又キャンプの主腦者會議の議題となつた風でもないから假令日會からの通知があつたにもせよ一般キャンプ員の問題とならない事に代表者を送ると云ふことは到底あり得ないことでそれを遺憾とするは思ふもの、無理ではあるまいか然らばマカテオ同胞は組合組織に反対かと云ふと恐らく他のキャンプ員以上にその必要を實感してゐる筈である例へば最近の排日事件で第三者から事實の有無に拘らず誇大に宣傳されて自他共に少なからず迷惑を蒙つた一事に照しても斯かる場合相互聯絡の組織があつて事情を明らかにする機會があれば非常に便利だと云ふ事を痛切に感じてゐたマカテオ同胞は本來なれば日會今回の擧に對して率先して立つべきであるが寧ろ反對の態度を示したのはこの意味に於ても明らかに反日會熱の表現と見るべきである

△私の見る處に依ると元來マカテオ同胞は日會の事には頗る冷淡であるよりも無關心でゐる様である何事を決議し如何なる名案卓説を發表するともそれが日會お手製のものである限りマカテオ同胞とは無關係のこと、せられてゐるのみならず米化運動で不當の寄附金を強請されて以來寄附を要する日會の事業には常にある種の偏見を持つてゐて向後日會の寄附事には絶対に應じまいと云ふ申し合せすら出来てゐると云ふ事である(未完)

反日會熱(下) マカテオ ゴーオー生

△日會對するこのマカテオ同胞の不信と反感の裏面には單に感情の上ばかりでなく理智的にもその長い間の自治的生活から自然に養はれてきたマカテオ同胞特有の氣分——自律主義の反映とも見るべきものがある即ちマカテオ同胞は常に白人労働者の間に伍しその日々の労働生活に必要な生活様式を持つてゐて敢て他の團體の指導を仰ぐ必要を認めない一個の團體である事がその長い歴史の中に未だ曾て日會の援助を求めた事の絶無なるに徴しても證明さるべきである且又マカテオ同胞の日會對する極端な不順を示すものは屢々日會当事者が熱心に會員たらん事を求められて加盟を欲しない事實に徴して知るべきである

△上述の理由から推断して日會今回の擧に積極的に賛成し得なかつた事も止むを得ぬ事でそれを遺憾とする日會当事者こそ深く反省考慮すべきでないか

△序手に書くがこれは強ち日會役員ばかりでなく総べての有識者と稱する人々の中に見出す偏見謬想であるが一般労働者の事を無知且無力の集團と看做してゐる悪風である自分だけを有識有能と認める所謂智識的優越を誇る態度が頗る氣障であるが特に日會役員の中にはこの自分免許の有志家氣取でゐたがる愚者が多い様である一例を示せば排日事件に就いて實狀調査と稱して出張した理事労働部長が当事者たるキャンプ員の意向をも求めずして直ちに會社の事務所に到り歸路キャンプに来るなどこの官僚式の遣り方がやがて彼等自身平素深く自惚れてゐる心の無意識の表白である當時吾々が彼等の來訪に反感こそ覺え感謝の念を持たなかつたのはこれが為めである

△然し日會問題と組合組織のことは自から別問題である私は改めて過日協議會の内容に就いて書いてみたいと思ふが来る土曜日の夜當地に於て日會当事者からこれが宣傳的講演會が催されると云ふ事だからその後にする

3. 北米日本人會の対応には不満があつたにせよ、製材業における労働者組織の必要性自体は、大江を初めとする多数の製材業労働者が感じていたことであろうと思われる。1925年5月11日の『大北日報』に掲載された「次郎作」名の寄書はそのような製材業労働者の声を伝えている。すでに述べたように「次郎作」を大江の筆名の一つと断定することはできないが、その可能性はかなり高いと私は考えている。1920年代半ばの北西部製材業の状況、日本人労働者の立場を良く伝えているという理由で、ここで紹介する。なお、「次郎作」という筆名は『大北日報』の主筆、竹内幸次郎が「雑記張」を書く際に用いていた「太郎作」を念頭に置いたものであろう。

ソーミル従業者の労働組合組織必要 次郎作

▼當華州は太平洋沿岸諸州中に於て最も製材事業の盛んな地であつて豊富なる山林を到る處に所有し居るが

故に茲十年や二十年の歳月で採伐し盡して該事業が閑散になると言ふ憂は無い年々の産額は地方の開発され沿岸の産業勃興するにつれて益々増加の傾向を示すとも萎縮の徴は少しも見えないと言ふ極めて好況に在るそして此地に在住して居る同胞も多年該事業にたゞさはり生産要素たる勞力を供給する有力なるものとして近時斯界に認めせしめつゝある

▲従つて同胞社會に於ても陰然侮い(り?)難き潜勢力を為して今や數の上から見ても經濟力の点から見ても今後の同胞發展策を企圖する上に断じて輕視すべからざる重要な同胞社會の位置を占むる迄に至つた

▲殊に現在の如く諸方面行詰れる窮状に在つては勢ひ此方面に着目して着々と健實なる發展の基礎を固め前途の希望を抱かねばならぬと言ふ現状に在る

▲然しながら排日問題は逐年各製材所に頻發する勞働争議と相結んで吾々従業者を不當に壓迫し初め來つたのである而して其の結果如何と言へば吾々に取つて甚だ不利益且つ困難なる立場に陥らしめつゝあつて心ある者をして決して樂觀せしめない

▲吾々同胞勞働者と資本家との關係は昔時の如きものではない其の原因理由は種々存するが即ち吾々の勞働條件は何等白人勞働者と差異あること重く(ママ)⁸又近年同胞の老境に向ひて勞働能率の減退せる事や排日移民法案によつて新なる勞力の供給の中断せる等其他製材工場地方の經濟的發展等の諸理由は此れ迄吾々と特別關係を持続したる資本家の白人勞働者對策に變化を來し

▲殊に地方經濟に密接なる多數の白人勞働者の言ふには彼等の不合理不正當なる要求行動を除くの外は成る可く耳を傾けて彼等の意にしたがふるが如き資本家の態度が見えるのである又土地の有志家の該事業に投資して資本家たる關係は自然吾々勞働者にとつて面白からざる空氣を作つたのである

▲されば吾々は従來の如く資本家の庇護に甘んじ又曖昧なる態度を持しつゝ吾々の存在を保つ事が至難になつて來たのである

▲今後の吾々はどうしても在來取り來りたる態度を捨て、多數白人勞働者又は團體の反感を買不安の空氣を排除し吾々の進路を見出す可く何等かの對策を講じて以て將來に備ふる處が無ければならぬことを實感する

▲此時にあたつて個人の念頭に浮ぶは白人勞働者諸團體若くは一般民衆の誤解を解いて吾々の立場を鮮明にし彼等と隔和(ママ)親善を計り

▲内は同胞勞働者一致團結して相互の意志の疎通を求め疾病傷害等の事故障の場合又は勞働紹介其他諸問題を解決し延いては吾等の生活改善を促進して利權の伸張に當る自助機關たる勞働組合の吾々勞働間に組織せられんことを希望してやまないものである……

組合組織の途上に幾多の困難障礙横はるとも此際勇猛心を發揮して多少の犠牲は忍んでも此種の相互救濟機關の成立に助力せられんことを懇願するものである

▲然るが故に吾々の周囲に添ふ事を避け一步を進めて彼等と握手し利害を共にし行動を同じうし提携の一路を辿つて生産に參與す可き必要を生じて來たのである

4. 大江源太郎は、『北米百年桜』所収の前田得一や峰岸竹次の回想ではマカテオ製材所の青年たちのリーダーとして紹介されている。マカテオは日本人勞働者がかなり早くから就働していた製材所であるとともに、ブックマンを互選する自治制のキャンプとして知られていた。そのような中で大江たちの活動も可能になったのであろう。しかしながら大江自身は、まもなくマカテオを離れて他の製

材所に移ったようである。次の寄書はその大江が久しぶりにマカテオを再訪しての感慨と同時に観察である。マカテオに関する記述は日本人移民史の史料に少なくないが、1928年の1月24日と25日の両日の『大北日報』に(一)と(二)に分けて掲載されたこの寄書には、『北米百年桜』や『米国西北部日本移民史』にも記載されていないいくつかの事実が示されている。

マカテオ 廿二日 キャンプ雑記 大江生

久しぶりにマカテオ、キャンプを訪ねてみる、昔ながらの親しみが随所に感ぜられるハロー―と出會す人々から與へられる温い快感はやはり永く居た土地でなければ得られない情趣である新顔も大分見られるが古くからの知り合ひから見れば比較にならぬ少数である

願れば嘗て愛された人憎まれた人次から次へ見覚えのある顔が誰れも彼れも懐しく思ひ出される故郷へ歸つた気持ちとはこんなものであらうか

▲先輩小林君、大土井君の快活な談笑にも變りはない戸田老の温顔も懐かしい元氣一杯の若者大西君、北川君、上田君、吉住君等舊青年會時代の思ひ出の深い人ばかりである最近青年の群を放れて新家庭を持つた田邊君淋しい孤獨の生活に憧がれて人里遠い丘の家に自炊生活を始めた赤堀君日本へ歸つた人他へ転住した人生活の上の變化は此處にも可成流轉の相を現はしてゐる

▲マカテヲ(ママ)は他の製材所キャンプとは賃金其他一般労働状態に於て必ずしも優良の地とは言ひ難いが天然自然の風光に恵まれた住心地のよい所である第一仕事が年中無休に継続されることが何より辛抱人に適した土地である冬期に於て他の製材所が不景氣其他の爲め休業する場合にも此處は反對に夜業まで始めると云ふ繁榮振りを示めしてゐる

▲目下就働者人員七十五人餘にて夫婦者は二十組あり子供の數も可成り多く獨身者の爲には他のキャンプに見るが如き賭博飲酒淫賣婦などに夢中になり馬鹿騒ぎを演ずる悪傾向は全然認められず真面目に就働してゐる夫婦者の間には児童教育に専念意を用ふる結果自然と家庭改善などに注意すに至り一般生活状態は往年の腰掛時代とは餘程趣を異にしてゐる最近更らに夫婦者を中心として消費組合的組織を實現せしめ全キャンプ員の經濟的福利を計る計劃もありと云ふ元來自治政治を誇るところ丈あつて斯くの如き新しき試みも結束さへすれば案外容易に實行されるであらうと思はれる

▲既に新聞紙上に於いて屢々宣傳されてゐるマカテオ、キャンプの誇とすべきものに嘗つて青年俱樂部あり今やボーイス俱樂部幼稚園の経営等がある就中ボーイス俱樂部はキャンプ内の全部の通學児童に依つて自主自業的に組織された相互教化の原則の上に社交娛樂勉學を目的とする團體で設備維持に必要な一切の費用の大部分は各自の勤勞に依つてこれを支辨してゐる恐らく在米同胞間の児童團體に於て最も理想的團體であらう

マカテオ 廿二日 キャンプ雑記 大江生

(二)

▲マカテオ白人社會にて 日本人キャンプの事をヂヤシパニース、コロニーと稱してゐる尤も二十年近くも住居すれば當然そう呼ばれて不思議はないが最近一般米國民の日本人に對する偏見政治的傾向を想ふ時マカテオ多數の白人が吾々を殖民視する心情は確に打ち解けたものであるこれ永年キャンプ員諸君が相互の融

和に盡した結果である今後も一層この方面に注意して自己の生活安全の爲めにも協力一致されん事を期待する

▲今年正月より友人北村磯次郎君が新たに本紙の通信員として活躍される事になった僕は只管同君の健筆を祈る

5. 1935年に大江は、「山家朴人」の名で「労働者の聲」というタイトルの随筆的な文章を数本『大北日報』に寄せている。ここでは2月23日号に掲載された寄書を紹介する。労働者にとっての仕事、職場の重要性を説いたものであるが、NRA（全国復興局）のコードが北西部製材業でも実施され、影響を及ぼしていることが分かる。またこの寄書はセレック製材所において、長期勤続者が本人の意に反して解雇されている当時の状況を明らかにしている点でも、注目に値する。

労働者の聲 セレック 山家朴人

□

寒くなつて、雪が降つて人も車も動かなくなつて仕事にならず、臨時休業になた（ママ）からとて、天に向つて抗議を申込むわけにはゆかない。長の冬期休業から、クリスマス、正月と打ち續く物入りの後にまた休業、これでは全く貧乏労働者にはどうにもヤリクリが付かぬと云ふことになる。

□

労働者と云ふ者は働きさへすれば、何んとか生計の道は立つものだ。安ければ安いなりに、取高が少なければ少ないだけに、いづれか生活の方法はある。だが仕事がなくは食道を断たれたも同様全く策の施すところはない。

□

大底（ママ）の労働者の生活方針と云ふものは、未だ受取らぬ一日の若しくは一ヶ月の働高を豫想して樹てられてゐる。だからこれが狸の皮算用となつた場合には、生活の違算は忽ち深刻なる生活苦の赤字となつて表示される。

□

仕事がないから退屈、金がないから酒が飲めぬ、賭博が打てぬ、女郎買が出来ぬと云ふ獨身者の太平樂は先づ第二義的に考へてみても、二人三人の子供を抱え學校に通はせ、どうしても一定の生活資料を必要とする夫婦者には、一日の休業だつて中々粗略には考へられない。

□

コード制の下に労働時間は限定され、賃銀は一定したが、それで労働者は完全に食つてゆけると云ふ保証は與へられてない。働いて食ふ以上同時に失業者保険は當然附與さるべきである

□

日本人なるが故に必ずしも卑下する理由はなく、又日本人なるが故に特に虐使される理由はない。労働には一律の條件があり、賃銀は一定量の仕事によつて支拂はれてゐるのだ。極度に法外なる労働強化に對して一個の日本人の立場からでなく、一個の労働者としての立場から、自己の権利を主張すべきである。

□

言葉がわからぬから、仕事の不馴れだから、それで雇主に遠慮する時代は疾づくに過ぎてゐる。人種や国籍に依つて労働者を差別する思想も亦過去の偏見である。與へられた仕事に就いて、全力を擧げて働く以上言ふべきことは主張し、受くべきものは堂々と要求すべきである。

□

地方の製材工場や鐵道キャンプに於ける日本人労働者の集團生活も、昔ながらの個人個人の淺薄なる御都合主義から脱却して、更に一步前進して、協力一致して毎日の労働生活の中に蒙りつゝある。日本人なるが故に強制されてゐる不當なる酷使や不利益に對して、正當なる自分達の立場を擁護する為に、何んとか積極的に働きかけてゆく機關、自主的團體組織が必要なのではあるまいか

□

老人なるが故に、若しくはボツスの氣に入らぬから、只單にそれだけの理由の下に十年廿年勤續の古參者が斬捨御免的に解雇され、人減らしを喰つてゐるセレック同胞の現下の労働状態を思ふ時、一層その感を深くするものである。

6. 同じ1933年の5月9日の寄書は、1933年のメーデー時に大江が日本に一時滞在していたことを示している。どういう目的で帰国したのか、またいつ日本に行き、いつ合衆国に戻ってきたのかはこの寄書では明確ではないが、大阪のメーデーの記録であるから、彼の出身地である和歌山県に滞在していたのではないかと思われる。なお■は判読不明の文字である。

労働者の聲 日本のメーデー回顧 セレック 山家朴人

五月一日は國際労働日である、労働階級の祝日である、この日は世界の労働者が一斉に起つて、労働者としての力強い存在を天下に公示する日である、右も左もあらゆる所属團體の労働者は、一切平素の主義主張を投げ出して、統一された労働團體として、共同の目的貫徹の為に敢果ない闘争と宣誓する、若しそれストライキは資本家に對する労働者の逆襲的攻撃であるなれば、メーデー示威は當社會國家に對して、組合労働者としての威力と大衆的■■を明示する無産大衆の政治的デモと云ふべきである。

※

非常時日本、軍國日本、ファシズム擡頭の嵐の中に五月の風に煽られて街から街にハンランする労働歌の高鳴日本のメーデー示威、検束に次ぐ検束、労働者の街頭ヘタリ込戦術等闘争激化の珍風景をみせて、全国的に未曾有の混乱を演じた昭和八年の大阪のメーデーを僕は今思ひ出してゐる、

この日大阪は夜來の雨もすつかりあがり初夏の太陽さん〜とそゝぐ集合地中之島公園では、ひとしほ若葉の色を増し、咲き揃ふさつきも美しい、労働者達は集合時間を待たず續々公園グラウンドへ集る、黒のレーニン帽、葉ツ葉服、カーキー服の市バスの女車掌白衣の朝鮮婦人、エプロン姿の紡績女工、スローガンを大書した白布の旒、翻へる數十條の組合旗ワツシヨ〜のデモにグツシヨリ汗ばみながら、労働歌を高唱して長蛇の列を作つて行進する一万五千餘の労働大衆と、これに歡呼する街頭の未組織大衆並に無産市民によつて五月一日の都大路は埋められた。

※

踏む、蹴る、殴る、もの〜しき警官隊の引ツこ抜きに對して、ガツチリ組み合つた腕と腕との力強さ、

組合旗を中にワツシヨへの聲のもの凄さ、武装した羊の群の行進と、サーベルを付けた制服のモツブとの闘争、二万に充たぬ労働者の示威運動を警戒する警官の数は制服私服千二百名、検束用トラック二十臺、これが昭和八年度に於ける大阪のメーデー示威の全景、善くも悪くも同時にこれが又非常時日本の時代相でもあつた。

※

昭和七年は日本の社会運動をして重大なる岐路に立たしめた、マルキシズムの思想及び運動から、ナショナリズムの思想及び運動への転換的傾向が即ちそれであつた、満州事變を轉機として各無産政黨、労働団体の解体、分裂、合同、あらゆる無産階級陣営内に於ける、指導精神の再吟味再認識論、この社会運動史上特に記録すべき多事多難の社会状況下にて、卒直且大膽に我無産大衆の要望を如實に反映せしめたものは、このメーデー示威のスローガンに見ることが出来る、曰く、反戦、反動ファツシヨ粉碎、失業者にメシと仕事をよこせ——、これは恐らく全日本の労働者の痛切なる共通的叫びとして、各地のメーデーに於いていづれもこのスローガンを掲げた

(五月二日記)

7. おそらくニューディール体制下における合衆国労働運動の隆盛にも影響されたのであろう、大江が正面から労働者組織の必要性を訴えたのが、1936年2月8日と10日の大北日報に掲載された次の論文である。「次郎作」が私の考えているように大江の筆名の一つであるならば、彼の考えは10年前とほとんど変化がないことが分かる。同時に、日本人労働者と白人労働者、労働組合との関係にも大きな変化がなかったということもこの寄書から窺える。

一労働者の立場から 労働組合組織の提言 セレック 大江 源太郎

(上)

最近米國に於ける労働大衆の運動が、資本家階級の力を以てしても、政府の権力を以てしても、最早抹殺することの出来ない偉大なる社会的勢力を成してゐることは、労働組合運動の現状に照して明らかなる如く、就中三、四年——三、五年度に於ける¹⁰西北部沿岸の重要産業界を震撼せしめた彼のロング・シヨアメン及製材労働者の總同盟罷工の實行に據りて、益々その威力の大なることを公示したことは一般に認め得るところである。

言ふまでもなく組合運動は資本家に對する労働者の對抗運動であり、搾取階級に對する被搾取階級の自己防衛策として生れ出たもので、労働大衆の正當なる生活権獲得運動である。

今日労働者としての自己の利害について自覺したものは、等しく共同戦線に立ちて、共通利害に關して最善の方法を講ずべきは自明の事であつて、現今協同組合運動の意義を没却して、労働者相互の共存共栄の道は絶対に求め得られない、團結の威力を信じつつ互助觀念に徹して、その日々の生活に必要な一切の經濟的福利の増進並びに労働者の文化的生活の向上を計る為めには、全く組合運動の成果に待つ外なく、一個の労働者として日常生活の安全を期する上にも只一途協同組合組織の完全なる發達を計るより他に方策はない、その好むと好まざるとに拘らず、あらゆる生産部門を通じて労働者としての組織を持つことは、現在労働者階級としての避くことの出来ない時代的傾向であつて、同時にかくてこそ労働者も人間であると云ふ

自意識の下に堂々自己の権利擁護の主張を叫び得るのである、斯くの如き見地に立ちて同胞労働者の現状を顧る時、依然として舊態を脱し得ざる無力なる労働群を散見するばかりではないか、農園に、鐵道に、製材所に、キヤナリーに、又市内労働に、全く同胞労働者の實状は無組織、無秩序の集合であつて、只雇主の命ずるま、與ふるま、の條件に服する外なく、偶々不合理、不利益を感ずる事に對しても、何等抗争すべき手段方法機關等を有せざる憐れむべき状態に置かれてゐるのである。

一労働者の立場から 協働組合組織の提言 セレック 大江 源太郎¹¹

下、

同胞労働者として長い歴史を持ち集團的に最も力強い根底を持つ筈の製材所方面を見ても、其乱雑無氣力なる事寧ろ唾棄すべきものがある、二十年三十年といふ長い労働生活の上に、雇主からも充分その實力を認められ信頼されてゐながら、自己の地位に就いて確乎たる自負も信念も持ち得ず、徒づらにブツクマンと稱する一個のボツスの口先き指先きで、日々の労働生活の全部を支配されてゐる状態は全く情ない限りではないか、去年の製材ゼニスト（ママ）に際しても、同胞就働者の殆ど全部がストライキに参加して、二ヶ月餘の間生活を犠牲にして、戦つて來たにも拘らず、結局は白人労働者から協調を破る者として異端者視せられるなど實に馬鹿氣た話である。

遮莫、同胞労働者の現状に就いて忌憚なく評すれば、賃銀の値上げ、労働條件の改善、其他一般の労働者としての地位向上に關して、直接、間接白人労働組合運動は大勢に支配され且つこれが恩恵に浴してゐながら、尚且反對に資本家の懐の中に安住の地を求むる事を餘儀なくされて居り、従つて一朝労働争議の際には、當然與みせなければならぬ、白人労働者とも進んで一致の歩調を保ち得ず、當然反對せねばならぬ筈の雇主に對しても充分なる敵意を示し得ず、全く卑屈なる不偏不黨の態度にて、單に表面白人労働者に向つて好意を表する事に依つて、僅に事態を胡麻化しゆかねばならぬ不徹底さ意久地なさを思ふ時、弱者よ汝の名は日本移民労働者なりと言ひたくするではないか。

日々白人労働者の間に伍して個人的社會的に何等労働者としての人間並の主義主張を持ち得ざる同胞労働者の現在、やゝもすれば、白人労働者から、ある誤解を受け或は劣等視されることも止むを得ざる次第にて、この状態にして續かんか、益々同胞労働者の聲價を傷けるばかりでなく、經濟的にも益々窮地に陥ることは免れ難き現象にて、この際我等の最も急務なりと信ずることは、何等かの形体の下に同胞労働者を組織し訓練し、實際的に力強い團體として相互の福利増進に努力すべきことであると思ふ。

8. 1936年の末からおそらくは翌1937年の初めにかけて大江はシアトルに滞在し、その機会を利用して大北日報社を訪問し、製材業における労働情勢や日白労働者間の関係、さらには労働者が新聞に對して何を求めているかなどの問題について語った。その記事は1936年12月24日の大北日報に掲載されている。またこの訪問を踏まえて翌1937年1月15日、16日の大北日報に、「一労働者の立場から」というタイトルで新聞に對する労働者としての要望を寄稿した。ここではその記事と寄稿を紹介する。ここではインタビュー記事の中の、製材業労働者のうちで二世が約2割を占め、しかも徐々に増えつつあるという指摘が、特に興味深い。このことは製材業労働者であることに誇りを持っていた大江にとっては喜ばしいことであつたと思われる。本稿では紹介しなかつた1935年4月3日の寄書の中

で大江は、「同胞社會の根底をなす労働者の状態は、次第に悪化し労働不能に近い老衰者が殖えて、その後に来るべき第二世の職業選擇の上に、不思議に『労働』方面が困却されている事實は一体どうしたことか」と書いているからである。

製材所における一般労働關係 大江源太郎氏語る

ナショナル製材所の大江源太郎氏は今朝來社したが當分ローマンホテルに滞在する筈である。

大江氏語る。

『ワシントン州はタコマを除き一般に製材方面の労働情勢は他の労働方面よりも成績がよいやうである。例へば本年のロングシヨウメンのトラブルでも、製材業者の方では水上輸出が出来ないといふだけであるので比較的影響が無かつた。

現今は、ナショナルに居りますがスノーコルミー方面でも五十人以上の日本就業者が、よく白人ユニオンと協調してやつて居ります。左様日本人第二世は約二割強就働して居りますが、だん／＼殖えて行きますです。新聞紙に労働者方面の記事を少し殖やして頂きたい地方人殊に就業者としては、學説よりも實際生活に關係ある問題は特にインタレストがあるやうです。

労働者といつても私共日本人は傳統的のある運命づけられた信念でありますから、共産黨でも無ければ無政府主義でもなく、唯生活の改善を切實に感せさせられてゐるだけです。

が、生活の力といふものは大きなもので、自然私共と同じ就業者は白人と共に歩む上に於て相當の理解を持ち合つてゐますのです。』

一労働者の立場から ナショナル 山家朴人

(一)

僕は曾つて本紙の記者大石君¹²⁾に「地方労働状態」に就いて語つた序手に、一般労働者の間に多數の購讀者を有する新聞紙が、その日日の報導記事の中に何故今少し豊富に労働者の實生活に觸れたニュースを載せないかと云ふことに就いて話したことがある。

これは新聞を以て社會の公器とし、文化機關とし、新聞記者を公人と見る立場から、力めて記事の公正を求めると讀者として當然の提言であると信ずる。

(二)

運動欄は勿論のこと、家庭欄を設け、子供欄を設け更らに料理、裁縫、生花に至るまで日常生活に必要な記事を掲げ、講談、小説其他一般娛樂に關する記事日本近信、地方欄等の諸部門に分けて克明に編集されてゐる新聞紙の中に、特に労働者の關心を求めるとに足る労働欄の設けられてないことは、僕達には少なからず不満の寂しさを覺えしむるものである。

(三)

毎日多忙なる労働生活中に落付いて讀書する時間を持たぬ労働者は新聞雑誌を讀むことが精一杯の精神的娛樂である。特に新聞紙に對する愛着は非常なもので新聞を讀むことが労働者の重要な日課の一とつとさへなつてゐる。

然しながらわれ／＼が新聞紙に求むるものは單に新聞記事を通じて世界の變動を知り、社會の出來事を解

する計りでなく、更らに進んでわれへ自身の生活に必要なニュース——労働争議の内容、就職問題、雇傭条件、職場の問題、仲間の移動等に関する詳細なる記事である。(未完)

一労働者の立場から ナショナル 山家朴人

(四)

労働者の中に多数の讀者を持つことに依つて、新聞紙は必ずしも労働者の為めの機關紙となる理由はないが、廣告主の意向を尊重するが如く、一部特権階級又は有名なるが故に一私人の言行を特大に報導するが如くに、黙々として社會の重要な生産に従事する無名の労働者の個々の生活に就いても同様、その一般性と特異性に拘らず報導さるべきものであるとわれへは強く信ずる。

(五)

社會生活の根底を成すものは經濟の力である。そして現在社會構成の最も重要な經濟單位をなすものは労働者階級である。即ち生産者として又消費者としてこの明らかな社會的事實を度外視して世の中の一切の上部構造は成り立たぬ。

試みに今日同胞社會の諸形態から労働者の存在を拉し去るとしたら、果してその跡に何が残るであらうか銀行業者が、ホテル業者が飲食店が、果してその存在理由を何處に求むべきであらうか。

(六)

組織と、制度と、文化は一定の諸個人の生活過程から發生する。將來同胞社會の文化——道德的、宗教的、政治的發展は、社會の主動者たる労働者たる労働大衆の生活水準を高めることに依つて當然期待さるべきことである。

世上、眞に同胞社會の現状に就いて考慮し、又將來を按ずると自負する人達は同時に同胞労働者の現状に就いても亦深く考慮すべきである。

僕はこの意味に於いて特に社會の目であり耳である新聞紙に向つて、先ず率先してこの問題に関する論說記事を大いに掲載されんことを望むものである。

(十二日記)

おわりに

大江源太郎は、本稿で紹介したもの以外にも多数の寄書を『大北日報』へ送っている。時には愛犬を失った老夫婦を悼み(1928年1月25日)、時には乱闘沙汰を起こした製材所労働者の野球チームを批判した記事にかみつき(1927年6月18日)、また様々な問題をめぐって当時同様に『大北日報』に寄稿していた他の論客たちに論争を挑んでいる。彼の議論のすべてに説得力があるわけではない。しかしながら、大江の寄書の根底にあるのは、製材業労働者としての彼自身の自負と誇りであり、周囲の日本人労働者にも同様に誇り高い存在であって欲しいという願いである。そのことが、彼の観察と主張を後世に伝える価値のあるものとしているように、私には思われるのである。

1. 伊藤一男『北米百年桜』復刻版 (PMC 出版, 1984年), 484, 486頁。
2. ただし, ヨネダは山根には好意的でその活動を詳しく描いているが宮田については素っ気ない。カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』(新日本出版社, 1967年), 44-46, 90頁。
3. 伊藤一男『北米百年桜』, 266-267, 646-647頁。もっとも山岡は1923年に死去している。なお, 奥田峰山 (平次) は, やはり当時の日本人社会で尊敬されていた元老の一人であるが, 1933年3月2日の『大北日報』に山岡死後10年の記念会の様子を寄稿し, その中で「有力な後援者山岡先生を偲ぶ宮田労働君の顔は, さびしそふだつた」と書いている。この筆致にも暖かいものを感じる。
4. 伊藤一男『北米百年桜』, 388-390頁。『大北日報』1923年4月4日, 1925年2月21日, 1929年2月28日, 参照。なお, 1922年10月21日の『大北日報』のコラム「別口雑記帳」で中島悟街 (勝治) は, やや興奮気味に次のように書いている。

■ミシガン州デトロイト市に開催中の米國鐵道保線大會は, 目下鐵道罷業問題の喧しい折柄, その一議一論は天下の耳目を傾倒せしめてゐる, その大會に山根良章といふ日本人フオーマンが, 同胞鐵道労働者を代表して出席した

■短軀褐色の日本人が, 大會の一隅に陣取つて, 議場に異彩を放つてゐるを見て取つた加州の代表者は, 如何でそれを見免がすべき, 直接規則修正案を提出し, 日本人の除外を企てた, これがレヂオンであつたなら, 忽ち大多數でも二もなく通過したに違ゐない

■忽ち, オレゴン及ワシントン兩州の代表者席から, 猛然と反對が起り, 労働友愛主義の下に, 正義の議論は議場を押し, 加州組の陰謀は一蹴し去られ, 満場は一日本人のために更に拍手を繰り返した, 斯くして米國鐵道保線大會は確實に, 日本人の資格を認めたのであつた
5. 伊藤一男『北米百年桜』, 952頁。
6. 「竹内幸次郎『米國西北部日本移民史』復刻版 (雄松堂, 1994年), 159頁, 参照。同様の記述は『大北日報』にも多数見受けられる。
7. この集会は結局うまくいかなかったようである。翌1925年には北米日本人会労働部の主催でキャンプ長会議が開催され, まずキャンプ長組合を先んじて結成するという決定が成されている。なおこの会議にはマカテオ代表も出席している。『大北日報』, 1925年11月4日, 6日, 10日, 11日, 参照。またこれに先だつて北米日本人会は宮田主計を各キャンプに派遣しているが, その際の宮田の見聞は当時の『大北日報』に「キャンプ雑感」として17回にわたって連載されている。
8. この「重く」は「無く」でないと意味が通らない。事実, この時期には製材業における日本人と白人との賃金格差は消滅していた。村山裕三『アメリカに生きた日本人移民——日系一世の光と影』(東洋経済新報社, 1899年), 91-112頁, 参照。
9. 1926年9月7日の『大北日報』に掲載された「浦邊丘人」(内容から見て大江の筆名の可能性が高い)の「マカテオより」と題されたた寄書にも, これと似たような内容がある。
10. 原文ではこうなっているが本来はもちろん, 「三四, 三五年度」であろう。
11. 8日の文章のタイトルは「労働組合」であるが, 10日の文章では「協働組合」となっている。「(上)」, 「下,」も原文のままである。
12. 大石兵六 (赤堀最) であろう。

Note on Gentaro Oe, a Japanese Worker of the Pacific Northwest Lumbering Industry

Katsutoshi Kurokawa

At the mid-1920s, the Japanese exclusion movement by the labor unions, which had been stilled since the late 1910s, resurged in the Pacific Northwest. Disappointedly, many Japanese in the Pacific Northwest lost their respect for the cause of the labor movement of the United States in the late 1920s and 1930s. A few people, however, continued to seek the organization of the Japanese workers and their solidarity with the white labor unions. Gentaro Oe, a Japanese worker of the Pacific Northwest lumbering industry was one of them.

There are not many historical documents that mentioned Oe and I can clarify his life and accomplishment very little. He was, however, one of the diligent contributors of the *Taihoku Nippo* (*Great Northern Daily News*), one of the vernacular newspapers in Seattle in those days. He gave his comments on the problems concerning the situation of Japanese workers in the lumbering industry of the Pacific Northwest in many articles published in this newspaper. I introduce some of them in this note. From them, it is clear that he was proud of being a sawmill worker in the Pacific Northwest and hoped that the fellow Japanese workers also would respect themselves. For that purpose, he wished the organization of the Japanese workers of the lumbering industry.